

日本人の同調圧力について

4年12組21番

高嶋悠暉

目次

はじめに

第1章：日本人の同調圧力について-先行研究の要約

-

第2章：調査方法

第3章：調査結果

第4章：考察

はじめに

筆者は今までの人生で同調圧力が多くの場面で働いていると感じている。例えば、会議などでの話し合いだ。自分は少数派の意見を持っているが、多数派意見で話を進めたいという場の空気に押された経験を筆者はしたことがある。もっとラフな例をあげるとすれば、飲み会の1杯目の注文である。「1杯目はとりあえずビールで」という流れが定番であるのは筆者の周りだけではないはずだ。違う飲み物を飲みたくても雰囲気を負けてビールを頼んでしまうことが少なくない。このように同調圧力によって日常でちょっとした息苦しさを感じるのだ。もっと自分の意見を言いやすい雰囲気を生み出したいという思いから、今回テーマとして同調圧力を取り上げる。

同調圧力に関してわかりやすいことわざとして、「出る杭は打たれる」がある。これは周りと違ったことをすると非難されるといった意味のことわざがあるが、海外にはあまりない考え方である。目黒（2016）は、「アメリカには”The squeaky wheel gets the grease.（キーキー音を立てる車輪は油をさしてもらえる）”すなわち、『黙っているのは注目されない』というまったく逆の意味を持つことわざが存在します。」と述べている。アメリカでは出る杭になることが推奨されているが、日本のことわざである「出る杭は打たれる」は自分が抜きん出ると周りから非難されてしまいますよと忠告するニュアンスが読み取れる。従って、非難されることを回避することが推奨されているように感じる。

このように、他国と比較すると日本人には出る杭になることを回避する生き方が植え付けられていると感じている。しかし、アメリカでも大統領選挙で民主党派が多い地域では「隠れトランプ」と呼ばれる共和党支持者が非難されていた。このような現実を見ると、アメリカでも同調圧力が働いていないわけではないことがわかる。この論文ではあくまでも「出る杭は打たれる」ということわざがあるくらい、日本には同調圧力が強く存在しているという意味合いで進めていく。

また、同調圧力が存在していることが必ずしも悪いとは言い切れない。確かに、同調圧力によって息苦しい思いをすることはあるだろう。しかし、有事の際にはこの同調圧力は有効な掟として働いた。物江（2020）によると、「東日本大震災からほどなくして、この危機においても規律を重んじる日本人の姿が賞賛されました。略奪などの混乱が生じず、市民が節度をもって行動したからです。・・・これも空気という掟が機能したと見ればわかりやすい現象です。諸外国では、危機において必要な掟をすぐに準備できないため社会は混乱してしまうわけですが、日本においては必要な掟が勝手に生じるため、かなりのレベルで社会が機能します。細かく見ていけば小規模な暴動・混乱等々はありますし、実際に東日本大震災後にも見られました。それでも諸外国より混乱が少なかったのは自生する掟のおかげと見なせます。」とのことである。

以上より、まず日本人にはなぜこのような同調圧力が生まれやすいのかを調べたい。そこで、第1章として私がテーマにあげた日本人の同調圧力についてどのような研究がなされ

ているかを文献で調べてまとめ、議論の出発点としたい。そして第2章では第1章の結果を踏まえて特定の場面での同調圧力がどのくらい働いているのかをアンケート調査によって実際にデータを採ってみようと思う。そして第3章では調査結果をまとめ、最後に第4章で調査結果を踏まえた考察を述べたい。

第1章：日本人の同調圧力について-先行研究の要約-

(i) 中山 (2004) 『日本人の壁』

この本では日本人の国民性を、人間の性格を定める五つの因子に基づいて明らかにしている。五つの因子とは、「外向性と内向性」、「愛着性と分離性」、「統制性と自然性」、「情動性と非情動性」、「遊戯性と現実性」である。

これら五つの因子を簡単にわかりやすく説明したのが以下の表1である。下記五つの因子のなかで、筆者が今回研究したい同調圧力に関連していると思われる「愛着性と分離性」、「情動性と非情動性」についてに詳細にまとめる。

(表1) 性格を定める五つの因子

性格を定める因子		個人レベル	社会レベル
外向性と 内向性	外向性	外界に積極的に働きかける	積極的に海外に進出したり、異国、異民族と交流することを好む
	内向性	消極的で控えめ	海外に進出することや異国、異民族と交流することを好まない
愛着性と 分離性	<u>愛着性</u>	人間関係において周囲の人と同調しやすい	国際的な協調を好む。個人崇拜。
	分離性	自主独立の道を好む	孤立の道を好む。法やルールを最優先。
統制性と 自然性	統制性	意志が強く、物事に真面目に取り組む。勤勉である。	従事者が統制性の性格でなければ成り立たない仕事に従事する人の割合とそれに対する社会の評価度が高い
	自然性	仕事にあまりこだわりを持たず、自分の置かれた環境や自分自身をありのままに受け入れようとする。	浪人やフリーター等の社会における割合と、それに対する社会の許容度が高い
情動性と 非情動性	<u>情動性</u>	ストレスに対して過敏に反応しやすい	経済不況といったストレスに対して自殺者が多い
	非情動	ストレスに対して動じない	経済は不振でも国民の多くがケ・セ

	性		ラ・セラ状態で、自殺者も少ない。不況をチャンスと捉えられる。
遊戯性と現実性	遊戯性	新しいものに対する好奇心が強く、遊び心がありイメージや思考が豊か。	優れた文学者や芸術家を輩出している
	現実性	遊戯性の度合いが低い。	遊戯性の度合いが低い。

(出典) 中山治 (2004) 『日本人の壁』 洋泉社

※今回研究したい同調圧力に関連していると思われる「愛着性と分離性」、「情動性と非情動性」については太字にしてある。また、これら2つの因子のうち、日本人が当てはまる傾向がある因子には下線を引いてある。

・愛着性と分離性

中山によると、日本人は愛着性の極にある国民性を持っている。その中でも日本人は「過同調型集団主義者」であり、この中でも取り立てて信念などを持たず、集団の同調圧力に簡単に流されるタイプ(=付和雷同型集団主義)が主流となる。この付和雷同型集団主義を助長した行動原理とは、聖徳太子の唱えた「和」である。日本人の生活基盤の中核であった水田稲作農業は、「血縁」以上に「地縁」が重視された。地縁社会は、何事もムラ共同体のメンバーの協力なしにはことが進まない。それ故、「一に曰く、和を以て貴としなし、さからふること無きを宗とせよ」が重視された。このような環境では「衆の雰囲気」、「場の空気」に集団の意思決定が大きく左右される。

これに関連して、「ぼかし」コミュニケーションというものも存在する。集団で物事を決める際に、反対意見等は巧みに隠蔽されそれはあっても取るに足らないものであるかのごとく隠蔽される。その結果、問題の所在もぼかさされ、「先送り」されることになる。日本人の意思決定が後手に回りやすいのはこのためだという考えもある。

まず、日本人が「愛着性」という特徴を持っているのは、水田稲作農業に由来すると中山は主張している。ここでは、聖徳太子の唱えたとされる「一に曰く、和を以て貴としなし、さからふること無きを宗とせよ」が重要であり、周囲と違ったことはしないことが教えとして存在していたことがわかる。つまり、この文献によると今回の研究においては日本人の間で同調圧力が生まれやすいのは、遙か昔に行っていた稲作の名残りであるという考え方になる。ただ、稲作を行っていた国は日本だけではないはずであり、稲作をしていたからといって同調圧力が日本人特有のものであるとは言い切れない。

・情動性と非情動性

中山によると、人間の脳にはストレスに強いタフな脳と、ストレスに脆弱なデリケートな脳がある。このうち、日本人はストレスに脆弱なデリケートな脳を持つ人が多く情動性の極にあるとこの文献では言われている。日本人の脳がデリケートな脳が多いという傾

向は、日本人が内向性であること、和を尊ぶ理由、「ぼかし」コミュニケーションを好む理由を理解する材料となる。

デリケートな脳はストレスに対して不安感や緊張感などの感情的な反応を持ちやすい。これは、日本人が不快な現実を直視することを避けようとする傾向を持つことや「希望的観測」にすぎやすいことからわかる。不安感や緊張感に苦しめられないためには、辛い現実を「見て見ぬふり」をしながらやり過ごすか、「希望的観測」にすぎないのである。

「和」を好むのは人類に共通する行動様式であるが、デリケートな脳かタフな脳かで「和」に至るプロセスが異なる。デリケートな脳を持つ日本人は「ぼかし」コミュニケーションによって相違点や対立点を曖昧にすることで「和」を生み出す。このような「和」の生み出し方は「問題先送り」や「決断の遅さ」を招く。一方、タフな脳を持つ欧米人は互いの相違点や対立点を明確にして互いが自己主張を繰り返した後、妥協点を見出して「和」を生み出す。

また、日本人はリスクを取る生き方が苦手である。リスクは強力なストレス源であるから情動性の極である日本人にとっては不安感や緊張感を著しく高めることになり、結果的にリスクを嫌う社会が誕生する。このような社会においては失敗を許容しない空気が生まれてしまうのだ。

「情動性」という特徴は出る杭になることで周りから非難されること（＝ストレス）に敏感になってしまうというものである。そのため、デリケートな脳を持つ日本人は出る杭になることを恐れやすく、同調圧力が生まれやすいことが文献からは推測できる。

(ii) 藤原「日本人と『集団主義』」

この論文では日本人全体としては集団主義（いわゆる同調圧力）的ではないとされているが、学校教育においては集団主義が強く浸透しているのではないかという主張を展開している。この中で藤原は日本の道徳教育において「集団や社会との関わり」や「みんなのため」、「多くの人に伝える」ことが非常に多く明言されており、目的となっていることが問題であるとしている。つまり、このような教育を受けることで全員が同じ道徳観を養い、正しさに単一の「答え」があると認識することになった結果、学校集団主義の傾向が強まると藤原は述べている。

本論の同調圧力との関連で言えば、学校教育でこのような教育を受けているからこそ、一つの集団において合意形成等をする場合、答えが一つであるという前提が無意識のうちに形成されてしまうという考え方ができる。日本人に同調圧力が生まれやすい原因としては学校教育もそのうちの一つになり得るだろう。

(iii) 物江（2020）「日本を支配する『空気の暴走』は止められるのか」

物江は、日本に限らず同調圧力は存在していると主張している。その根拠として、同調圧力に関する実験では日本と他国では結果にほとんど差がないことなどを挙げている。その一方で日本人は強い同調圧力を感じていると主張する人もいる。その理由として物江は、日本には明確な掟が少ないことを挙げている。一例として日本では神様を絶対視しない習慣があり、神様との契約が絶対であるという強い掟が存在しないと述べている。そのため、曖昧な掟である「空気」が諸外国より発生しやすく、同時にそれが強い力を持つとしている。

本論との関連としては、日本では絶対的な掟がないが故に曖昧な掟である「空気」が発生し、同調圧力が生まれやすいということになる。

第2章：調査

第1章で先行研究を調べた結果、直接的ではないにしても日本人に同調圧力が比較的生まれやすい要因があるということがわかった。そこで、第2章では実際に身の回りにおいて同調圧力がどのくらい働いているのかということ調べていきたい。ここで、同調圧力という言葉の定義をおきたい。黒川(2020)は、「同調圧力は、少数意見を持つ人がいる場合に、多数意見に合わせるよう暗黙のうちに強制するということです。」と述べている。また、小林(2020)も、「集団の中で、多数派に合わせなければならなくするような圧力」と述べている。本論では黒川の同調圧力の定義を採用することとする。以上を踏まえてアンケートを作成した。アンケート方法は、LINEを用いてアンケートを一人一人に送信するというものである。調査日程は2020年12月13日～同年12月27日であり、アンケートを依頼した人全員から回答を得た。この方法では自分の知り合いにしかアンケートを取れないという事態に陥ってしまうため、その知り合いの知り合いにもアンケートに答えてもらうということもした。以下、アンケート内容である。

今回は、卒業論文に使用する同調圧力に関する調査にご協力していただきありがとうございます。

このアンケートで集まった結果については本論文にのみ活用し、それ以外の目的では使いません。

Q1.あなたの性別を教えてください。

- ・男性
- ・女性
- ・その他

Q2. あなたの年齢を教えてください。

- ・ 10 代以下
- ・ 20 代
- ・ 30 代
- ・ 40 代
- ・ 50 代以上

Q3. あなたの職業を教えてください。

- ・ 学生
- ・ 社会人
- ・ その他

Q4. 集団の中で、意見対立が起きたときにあなたは自分の意見を貫き通すタイプですか。それとも周りの意見に流されやすいタイプですか。

- ・ 自分の意見を貫き通すタイプだ
- ・ どちらかという意見を自分の意見を貫き通すタイプだ
- ・ どちらかという周りの意見に流されやすいタイプだ
- ・ 周りの意見に流されやすいタイプだ
- ・ 意見対立を経験したことがない

Q5. 集団の中で、誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられるという雰囲気や圧力を経験したことはあるか

- ・ いつもそうである
- ・ わりとよくある
- ・ ときどきある
- ・ たまにある
- ・ 全然ない

Q6. 自分が集団の中で多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪くなるのが心配）多数派に合わせるということがあったか

- ・ いつもそうである
- ・ わりとよくある
- ・ ときどきある
- ・ たまにある
- ・ 全然ない

Q7. 自分は少数意見や多様な意見を尊重するタイプだと思うか

- ・尊重するタイプである
- ・どちらかという尊重するタイプである
- ・どちらかという多数意見に同調するタイプである
- ・多数意見に同調するタイプである

Q8. 空気を読んで周りに合わせるができない人は嫌いだ

- ・はい
- ・いいえ
- ・どちらともいえない

Q9. 集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思うか

- ・そう思う
- ・どちらかというと思う
- ・どちらかというと思わない
- ・全然そう思わない

Q10. 同期の学生が普通の企業や役所に就職していくのに、それらとは少し違う就職先を選んだり、起業したりするのは、周りの評価や噂などが気になって、抵抗を感じるか。

- ・抵抗を感じる
- ・どちらかという抵抗を感じる
- ・どちらかという抵抗を感じない
- ・抵抗を感じない

Q11. 職場やサークル、ゼミなどが主催する飲み会は、本当は参加したくないが、他の人も参加しているし、後々の影響を心配して、仕方なく参加している。

- ・はい
- ・いいえ
- ・その他

上記のアンケートについて、どのような仮説があるのかを簡単に述べておく。

まず、Q1~3 は回答者の属性を問うもので、なるべくデータに偏りが生まれないように努めたい。次に、Q4~6 は集団の中で同調圧力がどの程度生じているかを調べる質問となっている。筆者の仮説としては、これらの質問では「意見に流されるタイプ」や「誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられるという雰囲気や圧力を経験したことがある人」、「多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪

くなるのが心配) 多数派に合わせること」がそれぞれ回答として多くなるというものである。そして、Q7~9 は同調圧力を働きかける可能性が高い立場になったとき、回答者はどう思っているかを調査する質問である。仮説としてはこれらの質問の回答として、「多数意見を尊重するタイプ」、「空気を読んで周りに合わせることを嫌い」、「集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思う」の割合が多くなると筆者は考えている。これらの回答が多くなればなるほど、同調圧力を受ける側にとっては圧力が強く感じられるものになると考えているからだ。最後に、Q10,11 は筆者自身が身の回りで最も感じる同調圧力のケースをピックアップしてみた。筆者は就職活動を一通り経験したばかりで、所属している部活等でも飲み会がある程度頻繁に行われていた(2020年2月頃まで)ためである。より具体的な質問となっているため、回答者からはよりリアルな同調圧力に対する考えが得られるはずだ。

第3章：調査結果

第2章のアンケートは54人の回答を得た。その結果は本論末尾に掲載しているので詳しくはそちらを見ていただきたい。最初の3問については、なるべくデータに偏りが出ないように幅広い世代、職業の方に答えていただくよう努めた。しかし、どうしても20代・学生が多くなってしまった。それを踏まえて、4問目以降の結果について述べていきたい。また、性別、職業別でクロス集計は行ったが年代別では行わなかった。これは前述にもあるが、20代が回答の94.4% (54人の回答者数のうち51人が20代) を占めており、分析するにはあまりにもデータが偏ってしまっているためである。

(i) Q4~6の結果

単純集計の結果は、Q4では半数以上(59.2%)が「周りの意見に流されやすい」、「どちらか」というと周りの意見に流されやすい」と回答しており、Q5では「わりとよくある」という回答が半数を占めた。Q6では、「わりとよくある」、「ときどきある」という回答が31.5%で同じ割合だった。

性別クロス集計の結果については、Q4~6いずれも男女では特に大きな差はなかった。ただ、Q4では「自分の意見を貫き通すタイプだ」、Q5では「いつもそうである」、Q6では「いつもそうである」という回答は女性にしか存在していないという違いは見られた。職業別では、Q4,5はほぼ同じような結果となった。Q6は学生は「いつもそうである」、「わりとよくある」合わせて5割であるのに対し、社会人は2割弱であった。

(ii) Q7~9の結果

単純集計の結果は、Q7では、「尊重するタイプである」が40.7%、「どちらか」というと尊

重するタイプである」が50%と、少数意見を尊重する派が9割を超えた。Q8では、「いいえ」が38.9%、「どちらでもない」が35.2%と空気を読めない人が嫌いな人はあまりいなかった。Q9では、「どちらかといえばそう思う」が48.1%と半数近くに上った。また、「そう思う」は13%であるため、集団の中で周囲と違った意見や行動パターンを持ったり、服装をしたりする人は自身はそうするわけではないが、わりと仲間外れにされてしまうという認識があるようだ。

そしてクロス集計の結果についてである。Q7では男性が半数以上「少数意見や多様な意見を尊重するタイプだ」と断言している。一方で女性は7割もの人が「どちらかというとも少数意見や多様な意見を尊重するタイプだ」と回答している。男性女性どちらも少数派を尊重することには変わらないが、尊重する意思が男性の方が強いと言える。Q8,9は性別では特に差が見受けられなかった。職業別では、Q7では「どちらかというとも多数意見に同調するタイプである」が学生では6%、社会人では2割近くとなった。Q8は「どちらでもない」が学生約4割、社会人2割弱という違いが見られた。Q9では「そう思う」、「どちらかというともそう思う」合わせて学生が約65%、社会人が約5割という結果となった。学生の方が多数派の行動パターンや服装と違う人が仲間外れにされがちだと思う人が若干ではあるが多いようだ。

(iii) Q10,11

単純集計の結果は、Q10では、「抵抗を感じない」が31.5%、「どちらかというとも抵抗を感じない」が29.6%となった。職業選択においては、多様性を尊重する傾向があるようだ。Q11は、「はい」が37%、「いいえ」が59.3%という結果になった。飲み会に関しては後々の影響を心配して仕方なく参加している人が4割近くいるようだ。

クロス集計の結果は、Q10では男性は「抵抗を感じない」、「どちらかというとも抵抗を感じない」合わせて7割近くだった。それに対し、女性は「抵抗を感じる」、「どちらかというとも抵抗を感じる」合わせて5割近くであった。Q11では、男性が飲み会に「仕方なく参加している」のが約3割だったのに対し、女性では半数以上だった。職業別では、Q10では全体的に特に差は見受けられない。強いていえば、「抵抗を感じる」と回答した学生が少数ではあるが8%存在するのに対し、その回答をした社会人はいないということが違う点である。Q11では、「はい」と答えたのは学生では約3割、社会人は5割近い結果となった。

第4章：考察

(i) Q4~6について

まずはアンケートQ4~6について考察していきたい。単純集計の結果から、日本人には筆者の仮説通り、同調圧力が生じやすいということがいえるだろう。Q4では「意見に流されやすい」、「どちらかというとも流されやすい」の回答が59.2%と過半数を超えているからで

ある。また、Q5で集団の中で誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられた経験が「わりとよくある」だけで50%となっていることから筆者の考える同調圧力はよく働いていることがわかる。ただ、Q6は少々意外な結果であった。筆者はQ6の回答結果は「いつもそうである」、「わりとよくある」が半数以上を占めると予想していたが、「わりとよくある」、「ときどきある」が共に31.5%という結果であった。このことから、Q4~6の結果を見る限りでは確かに日本人には同調圧力が生じやすいといえるが、強く同調圧力が働いているわけではないことがわかった。Q6では「集団の中で多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪くなるのが心配）多数派に合わせるといったことがあったか」という意見対立以前の段階について質問している。よって、たとえ自分の発する意見が少数派であっても口にして意見対立を起こすということをしているということが考えられる。第1章の先行研究では日本人は稲作文化由来のぼかしコミュニケーションを好み、デリケートな脳を持っている人が多いため意見対立を避ける傾向があるという主張が為されていた。しかし、今回のアンケート調査からはそれとは反対の傾向があるという結果となった。

この結果から、最近の教育ではディベートをよくすることが多いからだとして筆者は考えている。今回、調査対象は94.4%が20代と他の年代との比較ができていないためあくまでも仮説に過ぎない。その上で、中学・高校あたりから授業形態がただ講義を聞くだけのものから講義を聞いた上で自分の意見を発信し合うというものに変化しつつある。文部科学省(2017)によると、2017年改訂予定(当時)の学習指導要領の考え方として、主体的・対話的で深い学びのために、ディベートも含まれるアクティブラーニングの視点からの授業改善に関する記述がある。公にアクティブラーニングが推進されたのはこの時期であるが、これに先立ってアクティブラーニングを推進する流れは筆者が中学校のときからあった。地域によって授業形態の変化の時期に差はあるかもしれないが、このような変化は確実に起きている。そのため、筆者と同世代の20代も同じ教育を受けてきた可能性は高い。ディベート形式の授業では自分の意見を発信することが求められるため、当然違う意見が飛び交うことになる。従って、意見対立の経験値が積まれることになる。もし、仮に意見対立をするのがストレスであり、スポーツと同様にこれを経験値の蓄積によって克服することができるとする。そうであるなら、今の20代は受けてきたディベート形式の授業によって意見対立に対する苦手意識のようなものがなく、意見対立を避けることが少なくなっていると言えるのではないだろうか。

また、Q6の職業クロス集計の結果は、学生よりも社会人になると自分の意見を求められることが増えることが背景にあると推測できる。実際に現在社会人1年目の方に聞いてみたところ、「学生の時は意見を発信できなくてもどうにかなったけど、社会人になるとそうもいかない。」とおっしゃっていた。また、筆者は就職活動中、リクルーター面談やOB・OG訪問を通して社会人の方と接する機会が何回かあった。その際、社会人の方は自分の意見を常に持っている人を採用したいとおっしゃっていた。従って、社会人は自分の意見が少

数派であってもそれを発信することが求められることが多いのである。故に学生と社会人の間にはクロス集計結果に見られるような違いが生まれたのだろう。

(ii) Q7~9

次に、Q7~9 についての考察である。アンケート調査実施前はこれらの回答は同調圧力を強めるような結果が得られると予想していたが、その予想は外れたと言っていいだろう。Q7 では「少数意見や多様な意見を尊重するタイプである」が 40.7%、「どちらかという尊重するタイプである」が 50%であった。そのため、同調圧力を働きかける側になったとしてもその圧力を強めようとはしていないと筆者は考える。というのは、少数意見を尊重しているのなら同調するよう働きかけるとは考えにくいからである。また、Q7 の職業別クロス集計結果は、「どちらかという少数意見や多様な意見を尊重するタイプ」が社会人の方が多かった。これは学生よりも社会人の方が、人付き合いというものがシビアになってくるからであろう。

また、「空気を読んで合わせることができない人が嫌いかどうか」という Q8 については「嫌い」だと答えた人は 25.9%であった。よって、「嫌いではない人」は残りの 74.1%いるということになり、これも Q7 の回答結果同様に同調圧力を強めようとはしないと考えられる。ただ、「集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思うか」を聞いた Q9 の結果は、「そう思う」が 13%、「どちらかというと思う」が 48.1%であり、同調圧力を強めに働きかけているデータが採れた。Q7,8 と Q9 でこのような違いが見られたのはシチュエーションの違いが要因であると筆者は考える。Q7,8 では想定している場面が話し合いにおいて意見を交換するというものであり、Q9 ではその場面を含まれているが、どちらかという周囲とは違う行動パターン、服装に関する質問というニュアンスが回答者には伝わっているのだろう。違う行動パターンをする人は普段生活する上で付き合うのにストレスになってしまうということから仲間外れになると判断し、このような結果になったのだと筆者は考える。

(iii) Q10,11

そして、Q10 についてである。同調圧力が日本人には働きやすいという仮説から考えると、「抵抗を感じる」もしくは「どちらかという抵抗を感じる」が多くを占めると予想していたが、全然そのようなことはなかった。Q9 までのアンケート結果からも「抵抗を感じる」派が多いと予想できるが、この結果の背景には何があるのだろうか。それは終身雇用、年功序列制度の衰退があると筆者は考えている。これらの制度は近年では廃止する傾向があり、企業に長年勤め続けることや大企業に就職すれば安泰という考え方は以前よりも主流ではなくなってきている。そのため、世間に名が知られている企業に定年まで勤めるのではなく、個人が独自に様々な企業を調べて転職したり、自分の本当に合う企業を探す動きが強くなっていることが筆者自身も就職活動を経験して感じた。回答者も筆者と同年代の人が多

く、そのような就職に対する考え方のシフトを認識しているからこそこのような結果になったのだろう。おそらく回答者がもっと幅広い世代に分布していれば違う結果になったであろう。Q10の職業別クロス集計の結果からは、「抵抗を感じる」と回答した学生が少数ではあるが存在するのに対し、その回答をした社会人はいないという違いが見られた。現在、多様性が企業には求められる時代となっている。このアンケート結果の背景には学生と企業で働いている社会人の間にそのような多様性に対する認識の差があるのかもしれない。最後に Q11 であるが、職場等の飲み会には他の人も参加しているため後の影響を考慮して仕方なく参加している人が 59.3%になった。よって、同調圧力を感じながら渋々参加している人がやや多いといえる。ただ、飲み会といっても一人につきゼミ開催のもの、サークル開催のもの複数あると考えられる。そのため、全ての飲み会においてこのような考え方をしているとは言い切れない。また、職業別クロス集計の結果は、社会人の方が飲み会に仕方なく参加していると答えた人が若干多かった。飲み会が楽しい娯楽の場というよりも人付き合いという意味合いが社会人の方が強いと考えられ、このような結果になったのだと推測できる。

(iv) アンケート結果全体から

筆者は、同調圧力を構成する要素として少なくとも2つあると考えていた。

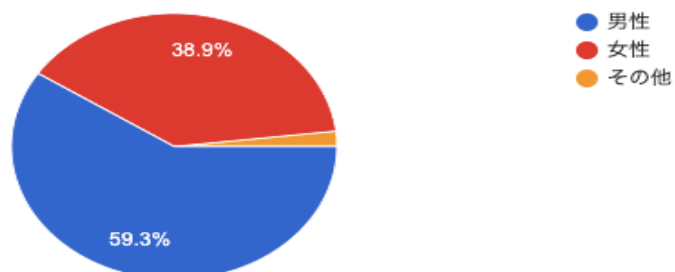
1つ目は、同調圧力を受ける側の心情である。「少数派だから周りに合わせないと非難される」といったものである。2つ目は、同調圧力を働きかける側の心情である。これは「少数派は多数派に同調しないと非難する」といったものである。しかし、今回のアンケート結果全体からこの2つ目の要素はあまりないのではないかと考えるようになった。その理由は、同調圧力を働きかける側になったとしてもその圧力を働きかけようという意識は強くないことがわかったからだ。上記(i)では同調圧力が生じていると感じている人が多くいたが、同調圧力を働きかける側を想定した質問である(ii)では圧力を働きかける側になったとしてもそのような意識は強くないことがわかった。故に、同調圧力というものは受け手側が一方的に考え過ぎているために生じる現象だと言える。

この論文は同調圧力によって息苦しい思いをしてしまうため、少しでも意見を言いやすい雰囲気を作るヒントになればという思いで作成してきた。調査結果から、集団において少数意見を発信することは割とできている人が多いという結果であった。それに加え、少数意見を発信したところで多数派の人たちもほとんどが少数派の人たちを非難しようとは思っていないことがわかった。そのため、今後は周りを気にせず自分の意見を主張することができるのではと思う。また、意見対立が起きてからも多数派の人はほとんどが同調圧力を働きかける意識は強くない。よって、同調圧力を意識して自分の意見を引っ込めてすぐ多数意見に同調する必要はないのである。

<アンケート結果詳細（単純集計）>

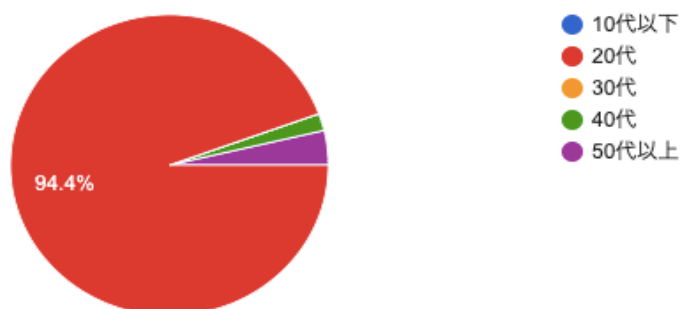
Q1.あなたの性別を教えてください。

54件の回答



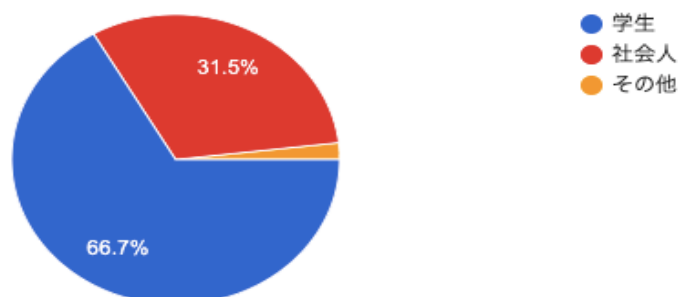
Q2.あなたの年齢を教えてください。

54件の回答



Q3.あなたの職業を教えてください。

54件の回答



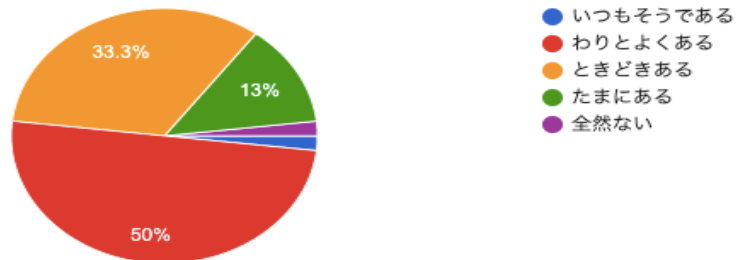
Q4. 集団の中で、意見対立が起きたときにあなたは自分の意見を貫き通すタイプですか。それとも周りの意見に流されやすいタイプですか。

54 件の回答



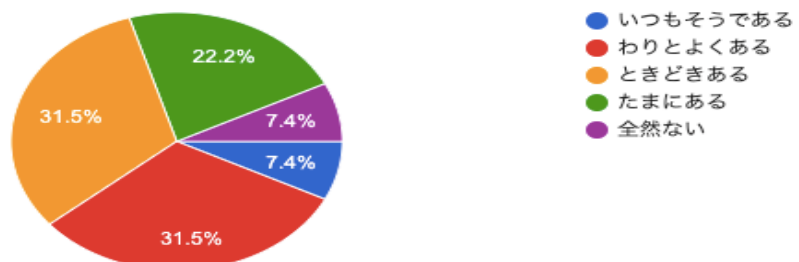
Q5. 集団の中で、誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられるという雰囲気や圧力を経験したことはあるか。

54 件の回答



Q6. 自分が集団の中で多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪くなるのが心配）多数派に合わせるということがあったか。

54 件の回答



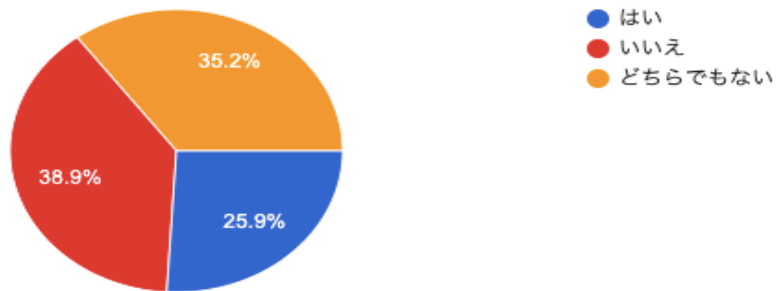
Q7.自分は少数意見や多様な意見を尊重するタイプだと思うか。

54件の回答



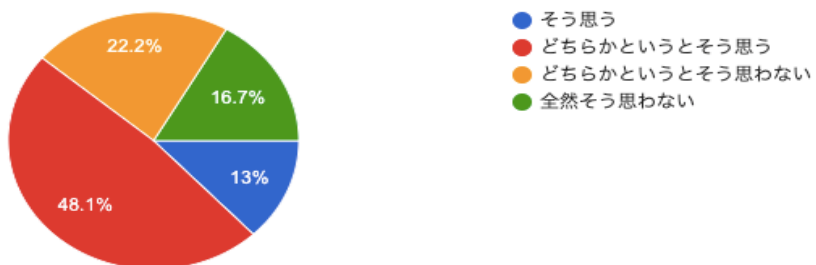
Q8.空気を読んで周りに合わせるができない人は嫌いだ。

54件の回答



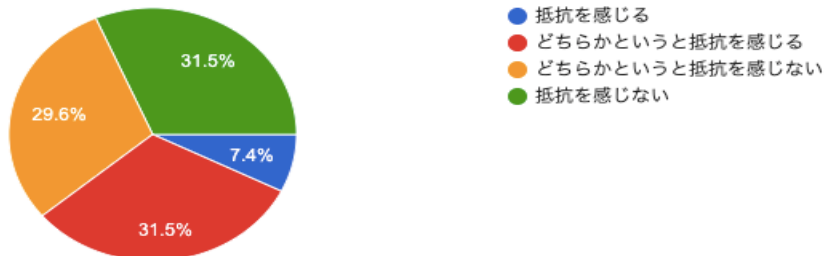
Q9.集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思うか。

54件の回答



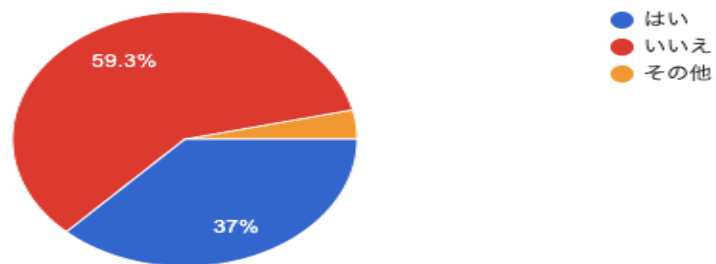
Q10.同期の学生が普通の企業や役所に就職していくのに、それらとは少し違う就職先を選んだり、起業したりするのは周りの評価や噂などが気になって抵抗を感じるか。

54 件の回答



Q11.職場やサークル、ゼミなどが主催する飲み会は本当は参加したくないが、他の人も参加しているし、後々の影響を心配して仕方なく参加している。

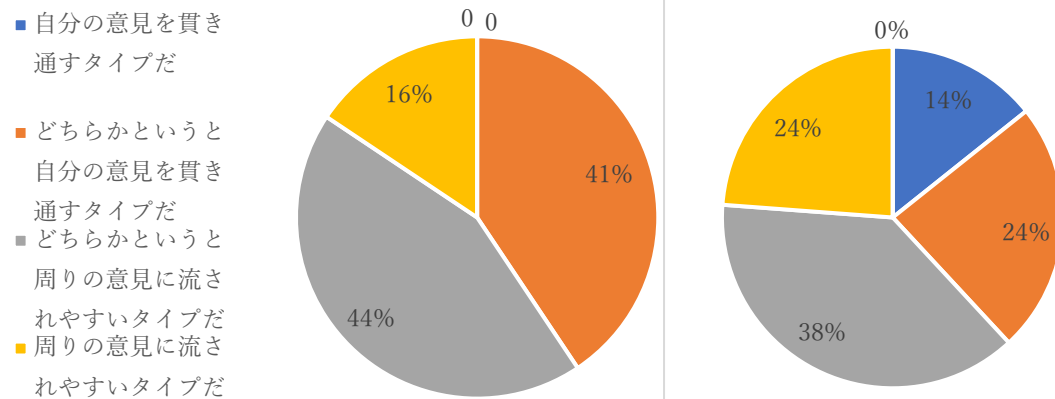
54 件の回答



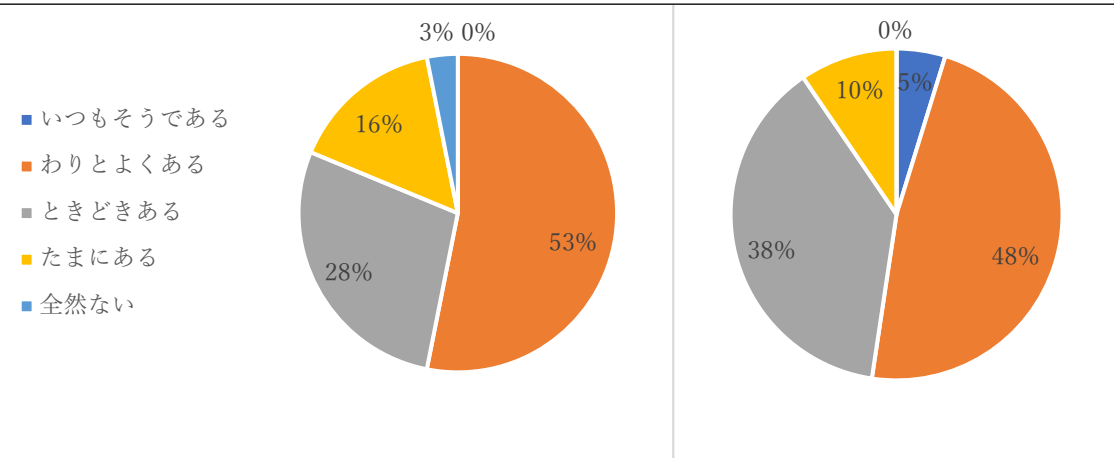
<アンケート結果詳細（クロス集計）>

・男女別

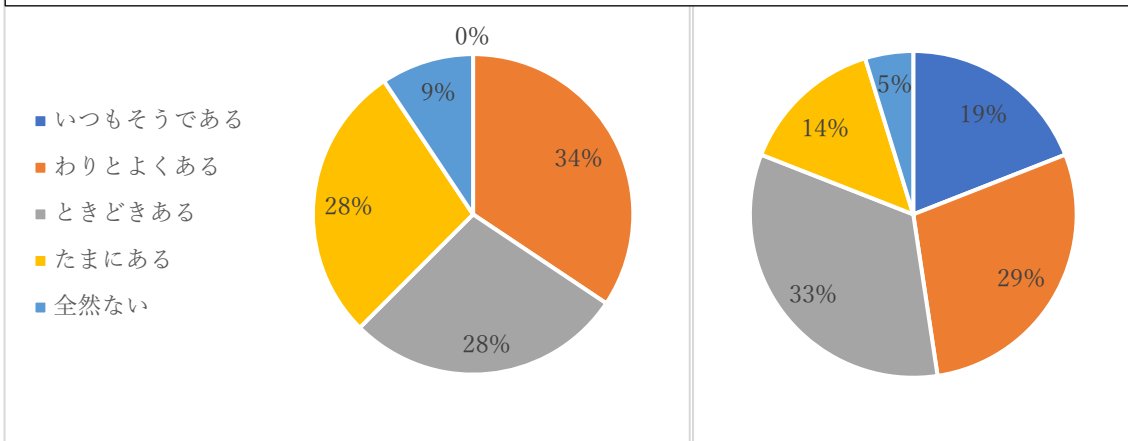
Q4.集団の中で、意見対立が起きたときにあなたは自分の意見を貫き通すタイプですか。それとも周りの意見に流されやすいタイプですか。（左：男、右：女）



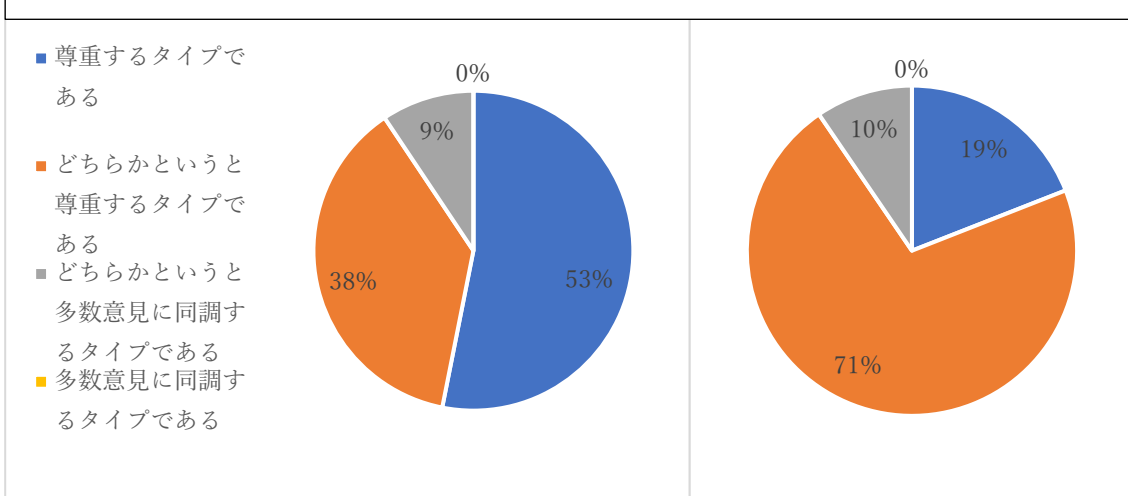
Q5. 集団の中で、誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられるという雰囲気や圧力を経験したことはあるか。(左：男、右：女)



Q6. 自分が集団の中で多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪くなるのが心配）多数派に合わせるということがあったか。(左：男、右：女)

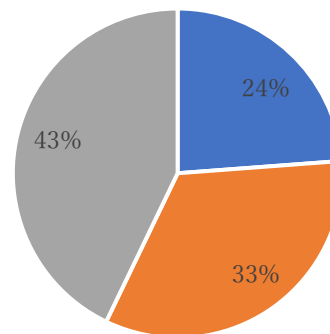
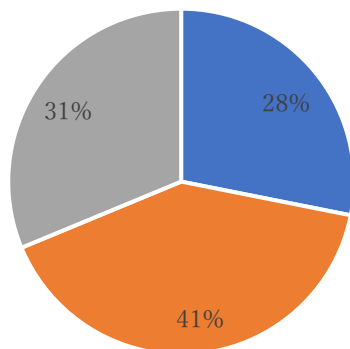


Q7. 自分は少数意見や多様な意見を尊重するタイプだと思うか。(左：男、右：女)



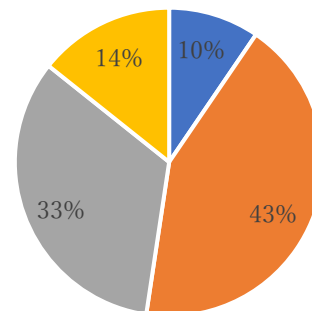
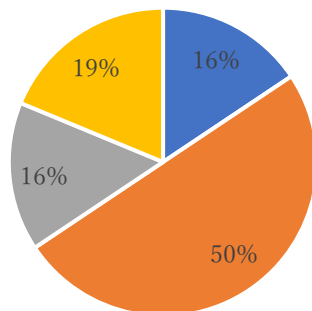
Q8.空気を読んで周りに合わせることができない人は嫌いだ。(左：男、右：女)

- はい
- いいえ
- どちらでもない



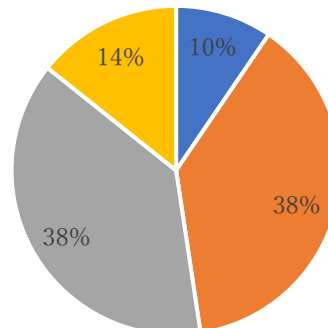
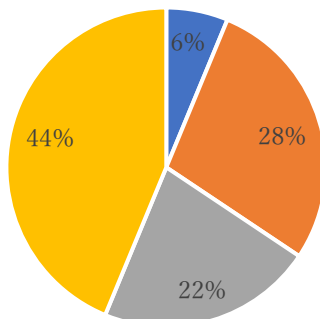
Q9.集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思うか。(左：男、右：女)

- そう思う
- どちらかという
そう思う
- どちらかという
そう思わない
- 全然そう思わない

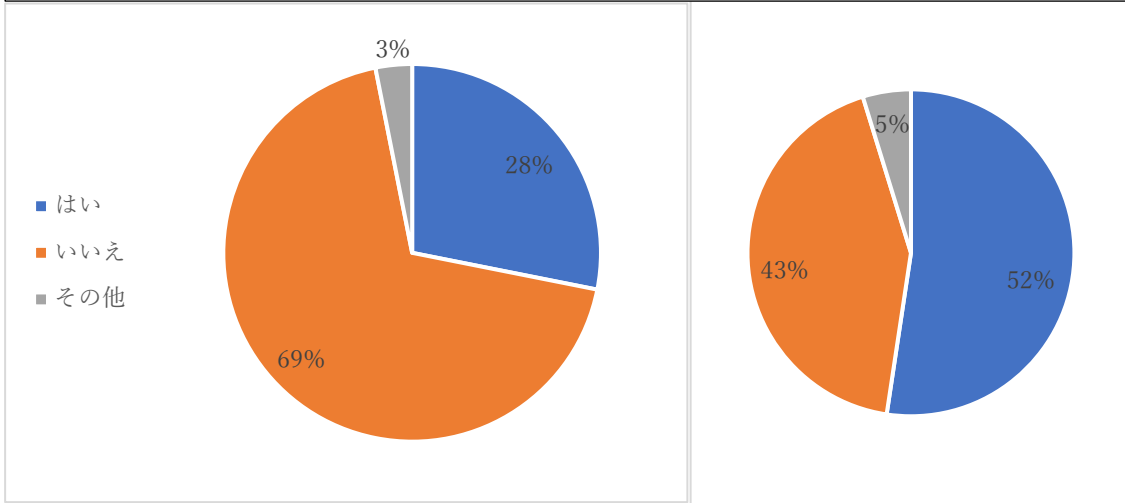


Q10.同期の学生が普通の企業や役所に就職していくのに、それらとは少し違う就職先を選んだり、起業したりするのは、周りの評価や噂などが気になって、抵抗を感じるか。(左：男、右：女)

- 抵抗を感じる
- どちらかという
抵抗を感じる
- どちらかという
抵抗を感じない
- 抵抗を感じない

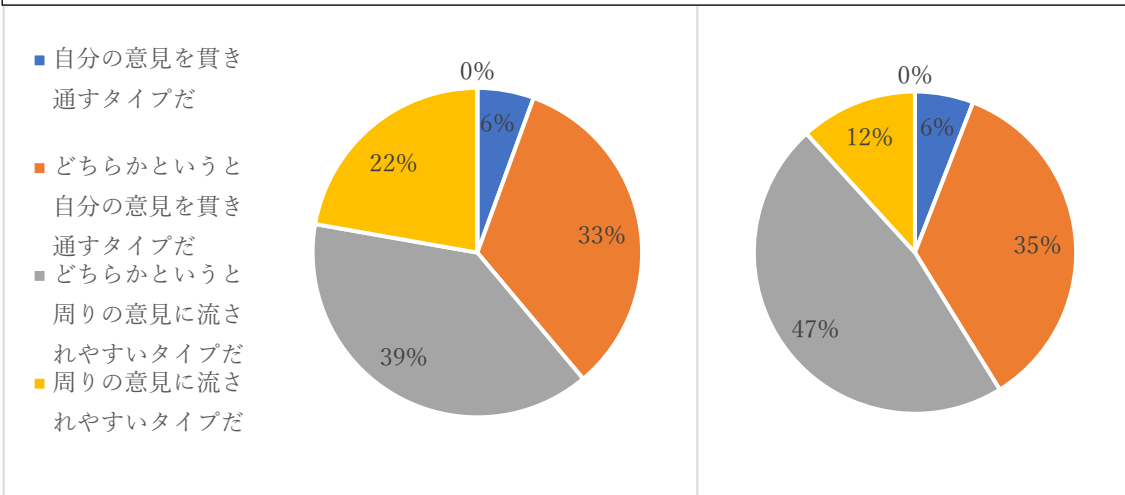


Q11.職場やサークル、ゼミなどが主催する飲み会は、本当は参加したくないが、他の人も参加しているし、後々の影響を心配して、仕方なく参加している。(左：男、右：女)

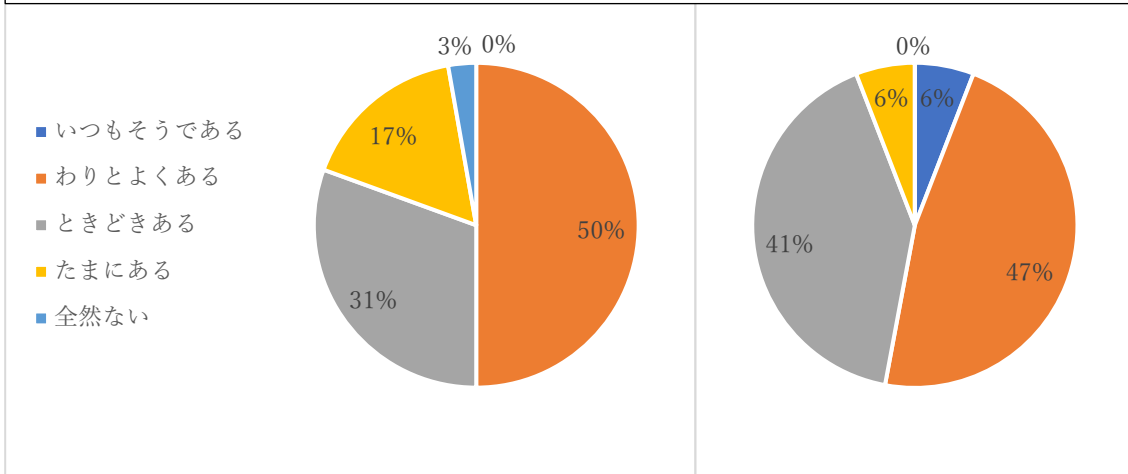


・職業別

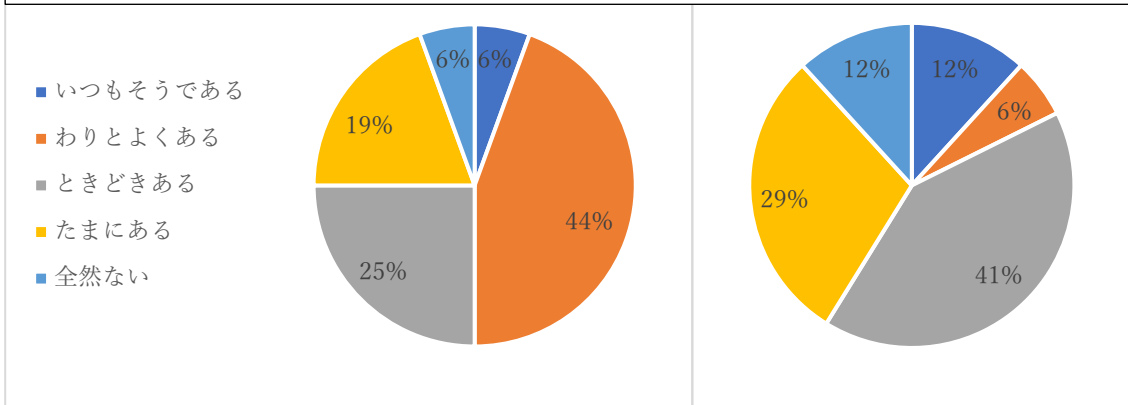
Q4.集団の中で、意見対立が起きたときにあなたは自分の意見を貫き通すタイプですか。それとも周りの意見に流されやすいタイプですか。(左：学生、右：社会人)



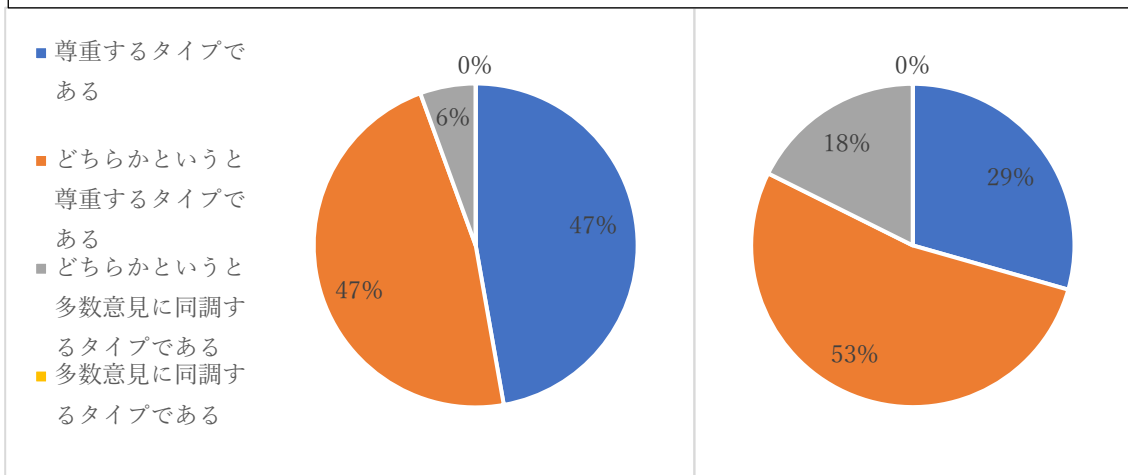
Q5. 集団の中で、誰か声の大きい人やリーダー格の人が主張していることに同調させられるという雰囲気や圧力を経験したことがあるか。(左：学生、右：社会人)



Q6. 自分が集団の中で多数の意見と違うけれども、表立って口にできず（口にしたら立場が悪くなる）多数派の合わせるということがあったか。(左：学生、右：社会人)

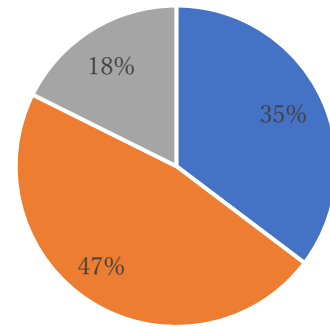
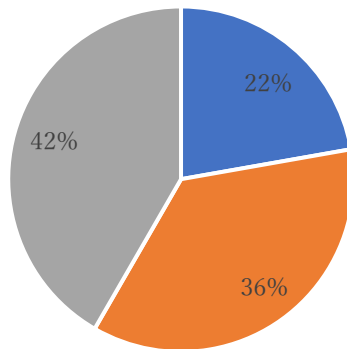


Q7. 自分は少数意見や多様な意見を尊重するタイプだと思うか。(左：学生、右：社会人)



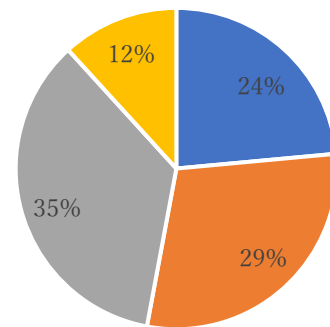
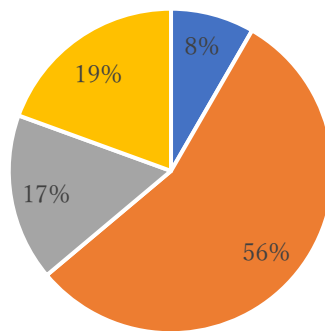
Q8.空気を読んで周りに合わせるできない人は嫌いだ。(左：学生、右：社会人)

- はい
- いいえ
- どちらでもない



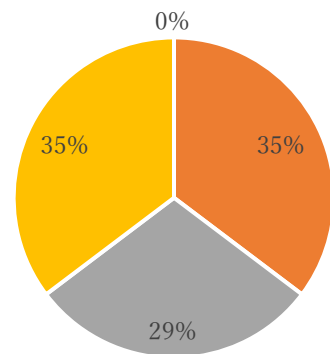
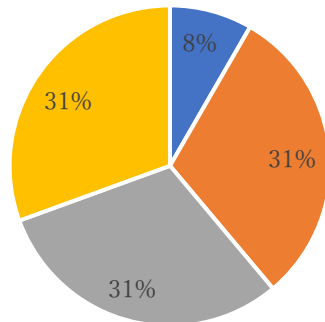
Q9.集団の多数派の意見や行動パターン、服装などと少し違う人は、いじめや仲間外れにされがちだと思うか。(左：学生、右：社会人)

- そう思う
- どちらかという
そう思う
- どちらかという
そう思わない
- 全然そう思わない

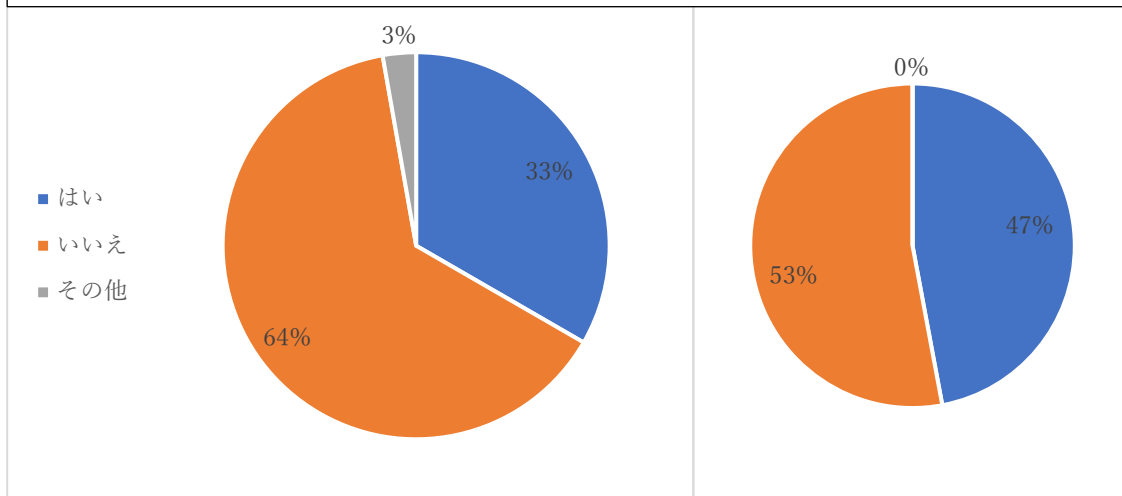


Q10.同期の学生が普通の企業や役所に就職していくのに、それらとは少し違う就職先を選んだり、起業したりするのは、周りの評価や噂などが気になって、抵抗を感じるか。(左：学生、右：社会人)

- 抵抗を感じる
- どちらかという
抵抗を感じる
- どちらかという
抵抗を感じない
- 抵抗を感じない



Q11.職場やサークル、ゼミなどが主催する飲み会は、本当は参加したくないが、他の人も参加しているし、後々の影響を心配して、仕方なく参加している。(左：学生、右：社会人)



・参考文献

目黒沙弥 (2016) 「日本と海外のことわざの違い4選。ことわざで国民性がわかる!？」
TABIZIN (タビジン) <https://tabizine.jp/2016/07/18/80647/> (2020年7月12日アクセス)

物江潤 (2020) 「日本を支配する『空気の暴走』は止められるのか」
<https://toyokeizai.net/articles/-/387179?page=2> (2020年12月23日アクセス)

藤原正篤『日本人と「集団主義」』
http://www.f.waseda.jp/k_okabe/semi-theses/1813Masaatsu_FUJIWARA.pdf (2020年12月23日アクセス)

黒川ヤスヒト (2020) 「同調圧力とは？日本人が群れたがる理由と同調圧力に負けない方法を解説！」
https://money.rakuten.co.jp/woman/article/2020/article_0241/ (2021年1月19日アクセス)

小林肇 (2020) 「ニュースを読む 新四字熟語辞典 第14回【同調圧力】 どうちょうあつりよく」
https://money.rakuten.co.jp/woman/article/2020/article_0241/ (2021年1月19日アクセス)

文部科学省（2017）「新しい学習指導要領の考え方」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-

[cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf)

（2021年1月21日アクセス）

中山治（2004）『日本人の壁』洋泉社